

中学校 C 男女共修におけるデメリットの改善

～実践例を踏まえて～

近藤 冬馬（長生） 渡辺 智之（夷隅） 川上 貴裕（安房）
吉田 周平（君津） 小笠原 大将（木更津・袖ヶ浦） 北上 睦朗（市原）

1 はじめに

学習指導要領解説では、「原則として男女共修で学習を行うことが求められている」と示されている。保健体育科における男女共修の意義は、体力や技能の程度及び性別の違いや障がいの有無等にかかわらず、仲間とともに学ぶ体験や運動の多様な楽しみを共有することは、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けた重要な学習の機会であるといった点にある。しかし、現状はグループ内でも二分化しており、男女共修授業を行っている学校と男女別で授業を行っている学校がある。学校規模や人数の関係が背景にあると考えられる。また、授業展開する中で体力差や技能差も懸念される大きな要因の1つであるとも言える。そこで、本グループでは昨年度より、「男女共修におけるメリット・デメリットについて」を主題として研修を進めてきた。昨年度の課題より、「運動量の減少」が挙げられたため、今年度は、運動量の増加にも視点をおくことと、昨年度と違う分野の実践例を紹介することによって、より多くの学校で男女共修授業の展開が広まり、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けた取組みが行えるようにする。

2 実践例

(1) 球技：バドミントン

- ① 対象生徒 第1学年 男子27名、女子37名
- ② 生徒の実態

男女共に素直な生徒が多く、互いを認め合い協力して活動できる集団である。運動能力で考えると、男女の差はあまりないが、どちらとも得意な人と苦手な人とで二極化してしまっている。体格の差や能力の差を感じにくく、性別関係なく互いを助け合い運動の楽しさを感じられる単元の選定が必要である。そのため、ネット型の身体接触がない「バドミントン」を展開した。

競技の特性

- * シャトルの飛行特性からラリーが続きやすい。
- * スピードの緩急や飛び方の変化に応じることから、巧緻性、俊敏性などを高めることができる。

ねらい

- * 性別関係なく、技術面や学びに向かう姿勢を補い合える関係を作る。
- * 話し合い活動の活発化に取り組む。(戦術)

男女共修によるメリット

- * 話し合い活動が活発になった。
- * それぞれの特徴を生かし、互いに認め合い、助け合うことができた。
- * 運動量が増加した。

| 展開の紹介・説明 | 展開の様子 |
|--|---|
| <p>*最初の授業で、バドミントンの競技性やルール、歴史、ラケットの握り方などそれぞれがICT機器などを活用して調べ学習を行った。そうすることで、運動が苦手な生徒も得意な生徒に対して教えることができ、活発な話し合いを展開することができた。</p> |  |
| <p>*毎授業でドリル運動を行い技術向上に取り組んだ。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①シャトル直上投げ ②シャトルキャッチ ③シャトルドリブル（フォア、バック、交互） ④シャトルキャッチボール ⑤ラリー（クリアー、ドロップ、ヘアピン、ロブ） |  |
| <p>*バドミントンのネットは使わずに、移動式支柱とストランテープを使い体育館を縦に仕切った。そうすることでコートを多く作って全員が活動でき、運動量も確保できる。</p> <p>*単元の後半では、混合ダブルスで試合を行った。ルールは、スマッシュは禁止で、クリアー、ドロップ、ヘアピン、ロブなどで空いている場所をめぐる攻防ができるようにした。</p> |  |

(2) 球技：バレーボール

- ① 対象生徒 第1学年 男子23名、女子17名
- ② 生徒の実態

新体力テストの結果から運動能力は全体的に高いとは言えない。また、部活動や地域クラブ活動でバレーボールを行っている生徒は全体の1割程度である。球技が得意な生徒、得意でない生徒の二極化がはっきりしている。そのため、基本動作の定着を図り、経験者をリーダーとして、ペア活動やグループ活動などを取り入れる。ルールや場を工夫しながらゲームを展開することがねらいを達成するために必要だと考える。

競技の特性

- *仲間と連携したプレーにより、協調性を身に付けることができる。
- *相手の攻撃に瞬時に対応できる敏捷性や瞬発力を養うことができる。

ねらい

- *話し合い活動の活性化により、課題解決に向け仲間と協力して取り組む。
- *男女共修による体格差を抑え、安全に授業を展開する。

男女共修によるメリット

- *個性や能力の異なる生徒同士が共に活動できる。
- *男女それぞれのよさを認め合うことができる。

| 展開の紹介・説明 | 展開の様子 |
|---|---|
| <p>*運動が得意でない生徒は、球技に対する苦手意識やボールが向かってくる恐怖心などが考えられる。そのため、個、ペア、グループなど段階的に学習に取り組ませる。</p> |  |
| <p>*グループ活動が終了したら、話し合い活動を行い成果と反省を出し合う。 *その後、再度グループ活動を行い、記録向上に向けた練習をする。 *見学者はICT機器で活動の記録を行い、各グループの話し合い活動に活用させる。</p> |  |
| <p>*ペア学習、グループ学習、話し合い活動のアドバイスを受け、バドミントンコートで簡易ゲームを行う。 *球技を苦手とする生徒に多い失敗場面は、レシーブであることから、レシーブはキャッチ、その後、トス、アタックというルールを工夫を行った。</p> |  |

(3) ダンス：現代的なリズムのダンス

- ① 対象生徒 第2学年 男子19名、女子14名
- ② 生徒の実態

1年次のダンスの授業では、積極的に活動することができ、自らの表現をすることができた。新体力テストから学年としての運動能力は県平均よりも下回っている項目が多く、日頃から運動を行っている生徒は少ない。ただ、運動することに対しては意欲的な生徒が多く、保健体育科の授業には積極的な生徒が多い。

競技の特性

- *リズムにのって、動きを組み合わせることで全身で踊ることができる。
- *仲間と関わりながら踊ることで、調整力、瞬発力等を養うことができる。

ねらい

- *仲間のアイデアや表現に対して声を掛けるなど楽しく取り組む。
- *男女の話し合い活動を通して相互関係を築き上げる。

男女共修によるメリット

- *男女共に互いのよさを伝えることができる。
- *他者とのよりよい人間関係の構築ができる。

| 展開の紹介・説明 | 展開の様子 |
|--|---|
| <p>*男女共習でダンスの授業を行い、グループには制限を設けなくて、生徒自身でグループ編成を行った。</p> <p>*男子のみ、女子のみ、男女のグループが編成され、ダンスを行う曲の選定を話し合いで決定。</p> |  |
| <p>*ICT機器を活用し、振り付けを考え、完成した部分を再度確認して行った。</p> <p>*授業の中間、終了前に話し合い活動の時間を設定し、改善すべき点、伝えたい点を話し合えるようにした。</p> |  |
| <p>*単元終盤ではICT機器を活用し、細かな部分まで見ることができた。話し合い活動では、男女関係なく意見を伝えることができ、互いのよい部分を認め合うことができた。</p> <p>*男子には大きく力強い動きが、そして女子には繊細かつ滑らかな動きが表現できるようになったことが、生徒の学習カードから読み取れた。</p> |  |

3 成果と課題

球技【バドミントン】、球技【バレーボール】、ダンス【現代的なリズムのダンス】の3つの実践における成果としては、お互いのよさを認め合えること、体力差・技能差を越えて交流ができることが挙げられる。個性を認め合い、他者との関係を上手に構築していく能力は、現代社会を生き抜く上で必要不可欠な能力であると考え、大きなメリットとなるだろう。課題としては、技能の高い生徒がサポート役に多く徹してしまうと、競争心や向上心の育成には向かないことが挙げられる。男女共修の中で技能の高い生徒のモチベーションを保つための工夫が必要であろう。運動量に関しては減ってしまう懸念があるが、展開の工夫次第で運動量が増加した実践も見られた。

4 まとめ

男女共修で運動を行うことでより他者との差や違いを感じ、相互理解が深まると予見される。しかし、身体接触が多い運動内容（バスケットボール、サッカー、柔道等）は、さらなる指導方法や展開の工夫が求められる。年々、運動能力の二極化の課題や性自認に関する配慮等、様々な対応が増えている。今回の研究を通して、改めて指導者一人一人が「男女共修におけるメリット・デメリットについて」試行錯誤を重ね、互いに意見を交わすことでよりよい実践ができると考える。今後も男女共修における実践を継続し、今の時代に適した保健体育科経営を心掛けていくべきである。